

都市環境デザイン会議全国大会 2016in 金沢 プロジェクト発表

日時：2016年10月14日(金)・15日(土)

会場：金沢市商工会議所ホール(石川県金沢市)

参加者：浅井健治、上坂達朗、川上洋司、木谷弘司、倉橋宏典、
(北陸ブロック) 小間井孝吉、坂田守正、坂本英之、島由治、島津勝弘、
高田実、竹村裕樹、谷明彦、玉森慶三、鏑隆弘、
徳本修一、中澤俊、新田川貴之、福塚正浩、水野一郎、
峠岡伸行、柳原恭順、山岸敬広、坪正浩、和田晃
10/14：計48名、10/15：計67名

プログラム：プロジェクト発表-1、2

- ・発表① (千葉 桂司氏)
大阪の都心・船場地区における「まちの案内板」(仮称:まちしるべ)設置のための基本検討
- ・発表② (中村 伸之氏)
国際シンポジウム「マイノリティ×ランドスケープ」
- ・発表③ (埜 正浩氏)
地酒文化とまちづくり～北陸4県の酒蔵を訪ねて～
- ・発表④ (阿部 彰氏)
東京における水上交通インフラ整備の提言
- ・発表⑤ (井口 勝文氏)
「歩行者空間による中心市街地の構成」「まちなかと新たな公共交通の展開」
- ・発表⑥ (石原 凌河氏)
災害の記憶継承に資する都市環境デザインの役割
- ・発表⑦ (西本 真奈花氏)
四国の都市環境デザイン見学事例集とモデルコース作成(愛媛県編)
- ・発表⑧ (堀口 浩司氏)
カトマンズ盆地の世界遺産地区のバッファゾーンと背後地の自力復興に関する研究
- ・発表⑨ (倉橋 宏典氏)
都市デザイン基礎(連続)講座～福井の都市デザイン
- ・発表⑩ (柳田 良造氏)
美濃路の町並みデザインセミナー

都市環境デザイン会議全国大会 2016in 金沢は、金沢市商工会議所において、開会にあたり都市環境デザイン会議前理事の玉森慶三氏が挨拶し、スタートしました。また、司会は、埜正浩氏が務めました。

プロジェクト発表として、1日目は、JUDIメンバー42名に加え、一般参加者の6名、計48名、2日目は、JUDIメンバー57名に加え、一般参加者の10名、計67名にご参加いただき、司会進行は工藤勉氏(関西ブロック)、趣旨説明は高見公雄氏(関東ブロック)、まとめは岡絵理子氏(関西ブロック)、伊藤登氏(東北ブロック)が務め、全10プロジェクトの成果をご発表いただきました。

北陸ブロックからは、発表③地酒文化とまちづくり～北陸4県の酒蔵を訪ねて～(埜正浩氏)と発表⑨都市デザイン基礎(連続)講座～福井の都市デザイン(倉橋宏典氏)の2プロジェクトの発表をしました。



司会・進行の埜正浩氏



JUDI 前理事の玉森慶三氏の挨拶



プロジェクト発表-1の様子



伊藤理事の質問

日時：2016年10月15日（土）

会場：金沢市商工会議所ホール（石川県金沢市）

参加者：浅井健治、上坂達朗、川上洋司、北川真理、木谷弘司、
（北陸ブロック）小泉普、坂田守正、坂本英之、島由治、島津勝弘、
高田実、谷明彦、玉森慶三、鏑隆弘、徳本修一、
中澤俊、新田川貴之、野嶋慎二、福塚正浩、水野一郎、
峠岡伸行、柳原恭順、山岸敬広、坪正浩、和田晃
計 121 名

プログラム：

◎基調講演「城の近代：利用・風致・象徴」
野中 勝利氏（筑波大学教授）

◎パネルディスカッション「城郭を遊ぶ」

コーディネーター

水野 一郎氏（金沢工業大学教授・JUDI 会員）

パネリスト

鳴海 邦碩氏（大阪大学名誉教授・JUDI 会員）

近田 玲子氏（近田玲子デザイン事務所・JUDI 会員）

野嶋 慎二氏（福井大学大学院教授・JUDI 会員）

コメンテーター

野中勝利氏（筑波大学教授）

が建物にも表れている。その他に、城は、建築、土木、造園、その他景観や利用等、計画的に造られたということでは、その当時の日本の総合芸術の傑作ではないか。明治維新になり、城が城としての価値がなくなると、政府は城をどう使っているのか分からなくて、各地で城の取り壊し等が申請された。現在、江戸時代の天守は 12 残っているといわれ、それ以外に空襲焼失したものが 6 つあることから、近代まで二十余りの天守が残っていたということになる。



会場が満員となったフォーラム

■ 基調講演(概要)

萩の城下町では、橋本橋から指月山が見える。橋と城との関係は、橋から遠くに殿さまがいるということ、山を象徴として感じ取ることができる。その城をつかさどる殿さまの目が、いわゆる監視をしている。橋は城下町にとって固有の特徴的なものであり、限られた所にしか造られない。橋と城はお互い見る・見られるという緊張感、距離感で、天守と一般市民の関係ということにもつながる。



野中先生（筑波大学）による基調講演の様子

天守は城の象徴で、松江城や松本城は黒、高知城や姫路城は白と、大きく二つに分けられる。白は漆喰そのまま、お金も時間もかかり、メンテナンスも必要。黒は板塀で、メンテナンスがしやすく、値段的にも多くは掛からない。しかも夜になると暗闇に隠れるという、殿さまや大名の意図

明治 6 年に城を存城と廃城と二つに分類する通達が政府からあり、陸軍省が利用する 43 の城を存城として指定して、残りは廃城にすることにした。廃城は大蔵省の所管で、全部払い下げ。存城になった城は、土地は売らないが、建物は高く売れというのが国の方針で、建物の保存ではなく、土地を確保するという意味でしかなかった。

いろいろな公園史の文献や研究などでは、政府は廃城になった所を公園に利用することを想定して城趾公園が増えたという書き方がされているが、国から指示された二つの制度をうまくミックスさせた地域の力、知恵だったのではないかと。

東日本大震災では福島県の二本松と白河城趾の石垣が崩れた。名古屋城の復元に 500 億円、熊本城趾の石垣と建物も 300 億円という試算があり、それに対する世論の動き、地域の人たちの意識。明治から約 150 年、江戸時代の約 260 年を合わせると 400 年。地域の中で 400 年残っていたものは、城以外には多分ない。失われなければ気付かない当たり前の存在について、崩れて初めてなくなってしまうのかなと思う。これは、景観の論理と似ている。なくなることはないだろうと暗黙の中で思っていたものがなくなる、崩れる、そういうことが逆に一つのベクトルとして求心性を持つ。それが城下町にとっての城の価値ではないか。

■ パネルディスカッション(概要)

明治維新以降、お城の主がいなくなると、そこで果たしていた機能も全くなくなってしまったのに、お城は地域のシンボルとしてさまざまな役割を演じてきていることが見えてきた。明治維新以降ほぼ 150 年弱たち、現在どうなのか、これからどうなっていくのだろうかと考え、いろいろな傾向も見えてきた。

都心の一等地に空地として存在している部分もあり、シンボルとして存在している部分もあり、あるいは都市公園の形で誰でも入れるパブリックスペース的な要素になっている部分もある。

一方で 450 年の歴史を示すような史跡であったり、建築であったり、土木であったり、あるいは庭園であったり、そんなものが残っていることもある。それも含めて、現在の都市的な機能、あるいは地域的な機能、あるいはわれわれの心情的な思い、精神的な支え、そのようなものがさまざまに絡み合っているということを感じることができた。一度議論してみようとなつて今日のテーマになっている。



パネルディスカッションの様子
(左より、コーディネーター水野先生、モデレーター野中先生、
パネリスト鳴海先生、近田氏、野嶋先生)

◆発表 1 「城郭を遊ぶ」

鳴海 邦碩氏 (大阪大学名誉教授・JUDI 会員)

大阪城をメインにお話をするが、弘前出身なので、弘前城のこともちょっと紹介したい。私が通った小・中学校は、弘前城の中にあつたが、文化庁が追い出してしまい今はない。現在、弘前城では石垣の修理を 10 年ほどかけてやることとなっているが、小さな頃、親しんだお城がどんどん変わってしまい、とても寂しい思いもしている。

大阪のいろいろな場所を外国から来た人がどう見ているかを、都市環境デザインやまちづくりという観点で考える手掛かりにしようと、2 年前

に留学生たちとめぐってみた。その一つとして大阪城を歩いたとき、ウクライナの彼女は、大阪城公園の中に弓道場を見て、普段接することができない伝統的なスポーツを目にできて面白かったが、案内板に英語で表記してある固有名詞はほとんど理解できない。今はいろいろな情報を多国語で書くのが常識になっているが、日本語をそのまま翻訳すると全然伝わっていない可能性があるということが、彼女が教えてくれた一つのポイントである。ドイツの彼は、観光的なことではなく、公園なのだから市民がどのように使っているか、市民にとってどういう場所なのだろうかということを知りたいと言っていた。

大阪城は、戦前は砲兵工廠、弾薬などを作る工場がお城の半分を占めていた。空襲を受け、戦後の航空写真では地面が穴だらけである。それを国の方針で大阪城を江戸のときの変えていくと、近代が担ってきた大きな足跡が消えることになりかねない、とても大きい問題だと思う。

「遊ぶ」というテーマで、2009 年に F1 のオーストラリアのチームがマシンを展示して走らせた。多くの方は、「え?」と思ったが、3 万 6000 人が集まるイベントとなる効果はすごいということを実際に知ることができた。その後、大阪城公園には指定管理者を決定した。大阪市は、委託料を払わずにもうかったお金をもらう。しかし、景観を損なうような店舗などがあつたらどうするか、有料イベントである区域を限ってしまったらどうするか、施設の恣意的な運用など、やってみないと分からない状態が続いている。こういうことを、誰が見守ってチェックする仕組みもはっきりしていない。まちの真ん中のすごい場所なので、もちろん楽しい可能性はあるが、やり方を間違えると悪影響が起きる危険性も残っており、大阪城は遊び過ぎる可能性があるかと危惧している。

◆発表 2 「城のライトアップと街の光」

近田 玲子氏 (近田玲子デザイン事務所・JUDI 会員)

世界の城のライトアップについていくつか紹介する。ハンガリーのブタペスト。街の真ん中に川が流れ、水に映り込む景色が大変美しい街。ここは夜景が美しいことで有名だが、ライトアップを随分前からやられているせいもあり、光源がそんなに新しくない。高圧ナトリウムランプという以前から使われているだいたい色の温かみのある光がほぼ使われていることが推測できる。このような歴史的景観を照らす以外に、まちなかでは、

モニュメンタルな教会のタワーなども同じように照らされている。黄色ばかりの光の中で、白っぽい光があると逆に目立つので、商業施設は、だんだん白っぽい光を使い出す。そうすると、街全体をコントロールすることが必要になってくる。

ベルギーのアントワープ。船で北海の方に出入りする貿易で財を成した街だといわれているが、ライティングフェスティバルで有名。プロジェクションマッピングで建物を光で覆う、運河沿いの建物を光でまかなうようなことが、街全体でやられている。街全体の光のコントロールをどうやっているのかと市の方に伺うと、都市計画の方、プロのライティングデザイナー、市民などが参画して全体の計画の話をしたとおっしゃっていた。アントワープの法律では、プライベートな建物であってもパブリックな用途であれば、照明をパブリックなものとして付けられると法律で決まっているようだ。

フランスのナンシー。広場に来た人はみんな地べたに座って、30分間、音と光のショーを見る。これを計画、企画したプロジェクションマッピング会社が、自分たちがやったプログラムの評判はどうかを聞き回る。やりっぱなしではなく、ちゃんとフォローしている。そういう会社だからこそ採用されるのだと感じた。

フランスのリヨン。新しい街が広がっていて、王宮を見ながら、毎日川に映る光とともに、ライトアップ等を楽しむような生活をしている。フェスティバルが年に1回、12月の初めぐらいにあって、世界中から人を呼んでいる。ライトアップも含めた計画をして、駐車場を地下に移した。街全体の治安が非常に良くなり、人の意識も大変高くなったと聞いている。

中国の北京。すごく変化が激しくて1年違うと違う形になる。銀座顔負けのすごい明るさで、手法も新しいことをやっている。古い街なみを再生したプロジェクトがすごく人を集めている。

◆発表3「地域の城の活用について～福井城、丸岡城、大野城の事例より～」

野嶋 慎二氏（福井大学大学院教授・JUDI 会員）

地方でまちづくりをやっていると、城を避けて通れない部分があり、考えてきたことを説明する。

福井城。福井の特徴としては、駅が外堀の中にでき、市街化が非常に進んだ。県庁とオフィス街、中心市街地、城、これらが近くにあるということが最大の特徴。もともとは結城秀康という城主の下に、水と緑の雄大な城があったわけだが、震災

復興、震災復興の区画整理もあり、最終的には堀が一つになって、外部整備もしっかりと進んできた。ブルーバードのシンボルロードがしっかりとでき、震災の歴史と城下町の歴史の重ね合わせで、この街はできている。

近年、福井駅・城趾周辺地区まちづくりガイドラインを制定し、すり鉢状のスカイライン、昔の城下町にあった雄大な自然などが密度を低くするというのを考えた。もう一つ、遊ぶ場所を造る、お城との関係性をつくるようなものにしてほしかったので、こういうガイドラインを作った。

越前丸岡城。現存する最古の天守ということだが、昭和23年に福井地震があり全壊している。そのときには、丸岡町長が丸岡城は丸岡町の象徴だと駆けずり回り、何とか復元にたどり着いたということだが、一方で街の再建が遅れたと。その中で再建した意味は、非常に大きい。一貫して城が町民の象徴であったわけではなく、明治期には軍用地になったり、天守閣が取り壊される計画があったり、公会堂にしたということもあった。戦時中には軍用施設になり、震災以前は、繊維産業の労働者が丸岡城を中心とした所に住みついていてバラック街を形成していた。丸岡城の再建はスラムクリアランス的要素があったということもあった。

越前大野城。天空の城ということで今売り出している。朝市の七間通りとの連結が成されたということで、空間的にはかなりでき上がってきた。「越前大野城築城430年祭」ということで1年間かけて72事業を行い、毎週何かのイベントをやっていて、観光客もかなり増えた。まさに城を遊ぶということを今、大野はやっている。

「1.街の顔、地域のイメージ、アイデンティティーの資源として」、来訪者に対するイメージの発信やまちなか観光の玄関をつくる、市民に対する顔づくりというのもあり、歴史を感じるまちづくりというものも行われている。城址整備による期待感。城址を整備することそのものがまちおこしの期待感になっていく側面もあり、顔づくり、回遊の核づくりなど歴史を感じる物語もまちづくり資源になっている。

「2.風景、景観づくりの資源として」、城への眺望、城趾周辺の街の風景をつくる資源には必ずなっているということと、イベント空間としての役割があり、象徴と風致と利用ということで地域の城も活用している。

〈座談会での主な意見〉

(水野先生) お城がだんだん公園化してくると、夜は誰も行かない空間になってしまう。ライトアップすると夜もどうぞ来てくださいとなり、ライトアップと同時に、ナイトウォーキングができる空間になってきている。石垣などの辺りを照らすことでの街との接点、関係などについてはどうか。

(近田氏) ライトアップをあるものを照らすという意味合いにしか考えないのは違うと思う。光というのは、人の生活をどうフォローするかということが基本だと思っていて、それと街との関係、都市と人と光。その三つがちょうどうまくかみ合ったときに、美しいまちづくりが完成すると思う。そういう意味で、金沢は本当に恵まれている。

(水野先生) お城がエンターテインメントの場所としてだけに使われて、有料のゾーンになってしまっている。お城は誰でも入れる無料のゾーンのようなパブリックスペース、公園という形であるから、何かシンボリックに、復元の投資をしても誰も文句は言わないという感じがあるが、興業主としての何かが入ってくるとそれだけのお城になってしまうという、そんな危惧はないか。

(鳴海先生) ゾーンを造る・造らないは、臨時的にできる可能性はあるが、管理会社が提案しているのは、侍の文化を遊ぶパビリオンを造るというもの。一画から一画とパビリオンを造っていった、それをメインの事業にして、はしゃいだ感じの場所ができていくと予想される。初めは、あまり大げさにならないようにやっていくと思うが、切り崩されて海外に広がっていったらすると、誰がどこで止めるか見えないので、心配な面もある。

(水野先生) 丸岡城も大野城も、地域の平地に山があって、その上に天守閣が見える。その下には城下町があって、城と城下町の関係は非常に近いので、街なみ整備や遊水の整備など、いろいろな整備がお城をシンボルに動くという、城と城下町という関係がまだ非常に強く残っているように感じたがどうか。

(野嶋先生) 丸岡城の場合は、お城と山だけという感じで残っているのが非常にシンボルとなっている。大野の場合は、武家地も町民地も金森長近という有名な城造りの名人が、1574年にまちをつくった。お城と市街地をセットで素晴らしい街なみをつくって、水のシステムなどもつくりながらやってきた。平城ではなく、山があってシンボルとしてあるというのは、非常に重要なファクターとなっている。



左写真 コーディネーター水野先生、コメンテーター野中先生
右写真 パネリストの鳴海先生、近田氏、野嶋先生

(野中先生) 最近では木造という流れの中で、鉄筋コンクリートは否定的な意見も結構あるが、大阪城の天守閣は、50年以上の歴史を経て、もう今や登録文化財になっている。近代建築として評価されていることになるので、一概に、例えば名古屋も RC 造、エレベーター付きという立派な建物をなくして木造にするということが、果たしてどうなのかなという気がする。いずれにしてもしっかり地域に根差しているならば、しっかり文化財としての保存の価値が認められるということにもなる。

戦前の新聞などを見ると、あるイベントがあった場合、すごくライトアップをして、文字どおりの不夜城という形で夜な夜な人が集まるようなこともあった。一方で、照明を付ける・付けないというのが議会で議論になったときに、当時を想像すると、なかなか男女が密会する場所がなくて、城跡であいびきがあって警察に捕まったというようなことが新聞記事に出ていて、それが逆に、城跡が一つのはけ口になっていたのかなという気もした。

戦前のある時期に城跡から外に移転したという中で、福井の場合は 1960 年代にも県庁の建て替えの議論の中で、外に出るといった話もあったのだが、当時の県の行政側は、現地建て替えを選んだ。全国的には、前橋の群馬県庁は城跡にあり、高知県庁は城山のたもとにあるが、史跡に指定されているということで、いずれ建て替えるときには外に出なければいけないとも聞いている。そのような全体の流れの中で、福井も多分、次の段階では外に出るといったことがあるのかもしれない。

(水野先生) 都市にとって城郭とはどういう存在なのか。都心にあって空地が広くて、しかも何か歴史的蓄積がたくさんあって、学校だったり裁判所だったり、いろいろ造ろうと思うと、全て追いついてしまえばまた空白になってくる。何か、空白なのだけれど、持っている場のようなものは、すごくエネルギーがありそうな感じがする。魂の

居場所みたいなものまで感じるときもあるぐらい、力強い存在。どうしていったらいいと思うか。

(鳴海先生) 大きなお城はそれぞれ日本の動きを代表してきたものである。これまでの歴史の中で、江戸時代もお殿さまがいなくて、城代が派遣されてくる。そういうお城にずっとある種のシンボリズムを持つというのは、何か時代の流れの中にある物語にほれている人は関心があって、その人にとってお城が大事なのだと思う。それ以外の人にとっては空地なので、ちょっとやんちゃに遊ぶ、遊んでしまおうという人がいる可能性がある。

どちらがいいかという、大阪城は、遊ぶ方がいいという人が増える可能性があるのではないか。一方で、弘前城は、お城があってまちがあって、山が見えると、そういうのが弘前の歴史であり、文化である。地方のお城はそういう物語がとても強くあるから、みんな必死になるのではないかという感じがする。大きな街の城と地方の城は、相当違うのではないかと思う。

(近田氏) 私は以前、沖縄の首里城を手掛けたことがあるが、沖縄は政教一致。つまり、政治と宗教を、1人の王さまとその親戚ないしは妻で束ねていた。その政教一致ということから言うと、首里城は国民にとってみれば、那覇の市民にとってみても、拝む対象というか、心の全て、シンボル。日本の昔の形態も、実は政教一致であった。それが徐々に分かれてきて、宗教と政治は別になったけれど、高い所に造られたものというものが、一つの宗教的シンボルの役割も果たしていたのではないか。それと光が夜につけられたときの一番シンボルとなる、そういう存在だということから、やはり何か、もしも夜、そこがライトアップされることになると、その地域のシンボルには、当然なるだろうと思う。

(野嶋先生) 何百年間見守ってきたという、続いてきた歴史は、まちの中を探しても、やはりお城ぐらいしかないのではないか。人それぞれの思いがお城にはあって、例えば武士や侍など、そういうものに自分になりたいというのがある。武家のまちと、そうでない町民地で出発したまちは、やはりそここのところが違って、必ず誇りを思っているわけだ。いろいろな思いが人それぞれあって、何百年間続いている共通のものは、お城しかなかったということではないか。

(水野先生まとめ) 「城郭を遊ぼう」ということで、金沢はある意味で言うと 450 年間遊び続

けている。日本の中で働き続けている所と、遊び続けている所があるが、金沢は一番遊び続けている所ではないかという話を時々している。お城は、今はだんだん公園化して行って、ヨーロッパの広場やパブリックスペースに近いような、比較的誰でも自由に入れて、いろいろな思いで過ごせる、そういう空間になっているのではないか。そんな中で、祝祭空間的な部分や少し聖域的なものなど、いろいろな複雑な心理が入っているように思う。

さまざまな意味で、地域づくり、地域振興、地域をどうやったらいいのだということ、それから自分たちはどうやって、どこをシンボルにして生きていったらいいのだとか、そういう心の問題も含めて、お城が少しずつ姿を変えてきているけれども、何となく精神的な存在になりつつあるのではないかと感じている。



参加者やスタッフとの記念撮影

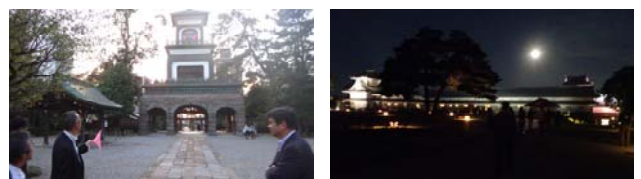
■ まち歩き

(尾山神社～西外惣構～しいのき迎賓館～玉泉院丸庭園)

金沢商工会議所から、尾山神社、西外惣構、しいのき迎賓館から、玉泉院丸庭園を通り、懇親会場の金沢城公園の五十間長屋までまち歩きをしました。

玉泉院丸庭園では、ライトアップ計画をされた近田玲子さんにアテンドをしていただき、参加者全員、素晴らしさに魅了されました。

まち歩き全般は、北陸ブロックの上坂氏、鏝氏、新田川氏にご案内いただきました。



尾山神社「神門(国重要文化財)」
五十間長屋のライトアップと、「待宵の月(まつよのつき)」

■懇親会

日 時：2016年10月14日（金）
会 場：割烹 魚常（石川県金沢市）
参加者：計 42 名

1日目の懇親会は、JUDI 北陸メンバー17名に加え、他ブロック25名、計42名にご参加いただき、ザ・金沢ともいえる浅野川沿いの「割烹 魚常」で、金沢の地酒と料理を堪能し、大いに盛り上がりました。



懇親会参加者でハイ・チーズ!!!

日 時：2016年10月15日（土）
会 場：金沢城公園五十間長屋（石川県金沢市）
参加者：計 74 名

2日目は、JUDI 北陸メンバー24名に加え、他ブロック28名、一般参加者の22名、計74名にご参加いただき、金沢城公園五十間長屋において、「城郭を遊ぶ」第4部を楽しみました。



美人の芸妓さんを挟んでご満悦のお二方

ひがし茶屋街の芸妓さんの踊りに魅了され、北陸4県の地酒32本の飲み比べと、参加者全員、気分も絶好調で親睦を深めました。



ひがし茶屋街の芸妓さんの踊りでおもてなし
北陸4県の地酒32本が勢揃い!!!



ほろよい気分でハイ・チーズ!!!

■ エクスカーション

日 時：2016年10月16日（日）
会 場：福井県坂井市東尋坊～三国
参加者：加藤哲男、玉森慶三、鏑隆弘、中澤俊、新田川貴之、
（北陸ブロック） 埴正浩 計 26 名

エクスカーションでは、東尋坊での遊覧船からの眺めを満喫し、三国のまち歩きを堪能しました。福井メンバーの加藤先生と玉森さんにアテンドいただき、まち歩きを楽しみました。



東尋坊の遊覧船巡りとアレックス・カー氏監修の「詰所三国」

—編集後記—

今回は、JUDI 全国大会 2016in 金沢ということで、全国から多くの会員にご参加いただき、3日間とも天候に恵まれ、すべてのプログラムを無事終了することができました。これも一重に、ご参加いただいた皆様、スタッフの皆様のお陰と感謝申し上げます。JUDI という組織が、楽しく、ためになり、そして元気を与えてくれる団体だということが再認識されました。今後も全国大会を通して、交流の拡大や JUDI の情報発信ができればと思います。

さて、次回は、6月上旬に、富山県内において、ブロック総会との同時開催、また、10月には、新潟県内においての開催となります。詳細が決まり次第ご案内いたしますので、奮ってご参加いただけますよう、よろしくお願いいたします。

【お問合せ先】

都市環境デザイン会議北陸ブロック
幹 事 ● 鏑 隆弘（金沢美術工芸大学教授）
事務局 ● 埴 正浩・高永智恵（㈱日本海コンサルタント）
TEL 076-243-8281 / FAX 076-243-8309
E-mail m-rachi@nihonkai.co.jp

JUDI 北陸ブロックホームページ
<http://www.judi-hokuriku.gr.jp/>
JUDI 北陸ブロック Facebook ページ
<http://www.facebook.com/judi.hokuriku>